

被服衛生と文学との接点 — コルセットの場合 — 「男性作家の作品を中心として」  
 ○中橋 美智子、村山雅己\*  
 (\*船舶艤装品研)

【目的】衣服は、第二の皮膚ともいわれるように、第一義的には健康を保つことにあり、同時に装飾審美上の目的でも着用される。しかし、装飾審美上を優先するあまり、時代の要請とはいえ、健康面への配慮が無視された時代があり、その例としてコルセットがあげられる。欧米では、16世紀から20世紀初頭にかけて、コルセットの全盛時代であった。当時を舞台とした文学書の中から、男性作家の作品を中心としてコルセットに関する記述を検索・収集し、特にコルセットと生体機能の関わりを把握することを目的とする。

【方法】当時を舞台とした文学書の中からコルセットに関する記述を検索・収集した。文学書より検索された文章より、男性作家の作品を中心に、女性作家との描写の違いを検討し、表現の特徴などの分析を試みた。その中でも、更にコルセットと生体機能に関わる事例を中心に、考察・検討を試みた。

【結果】男性作家の文学書7点（椿姫、ナナ、三銃士、戦争と平和、クロイツェル・ソナタ、麗しの皇妃エリザベト、明日は舞踏会）から、コルセットに関する記述が検索された。これらから、女性作家との表現上の大きな相違点が把握された。即ちコルセット着用による金属音（16世紀は鉄製のコルセットが用いられていた）、容姿の美しさ、コルセット着脱など客観的な外見上の表現に留まる作品が殆どである。女性作家の多くは、身体面（生体機能との関わり）、精神面（スタイルへの自己満足）などの主観的描写がされている。